

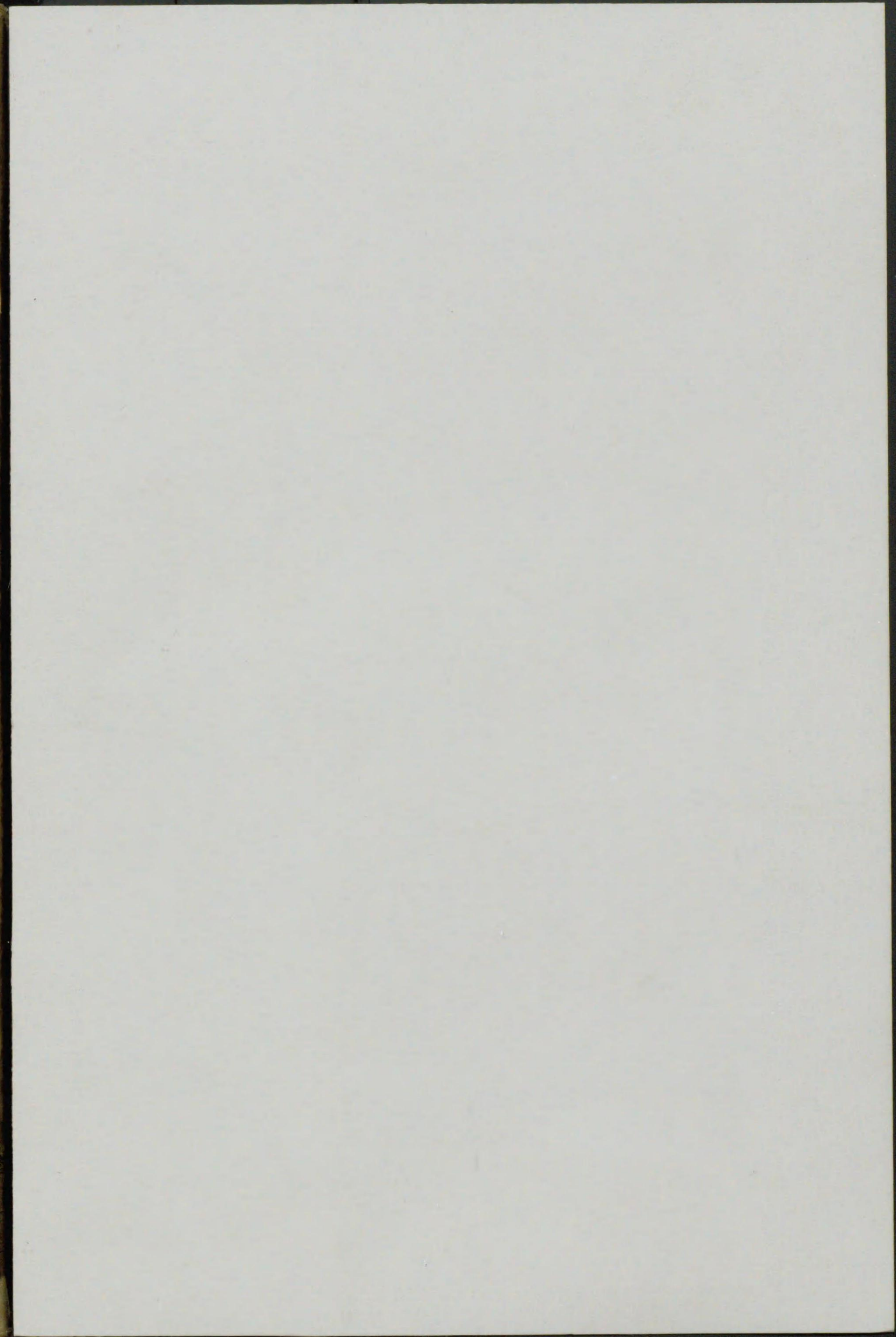
629
44

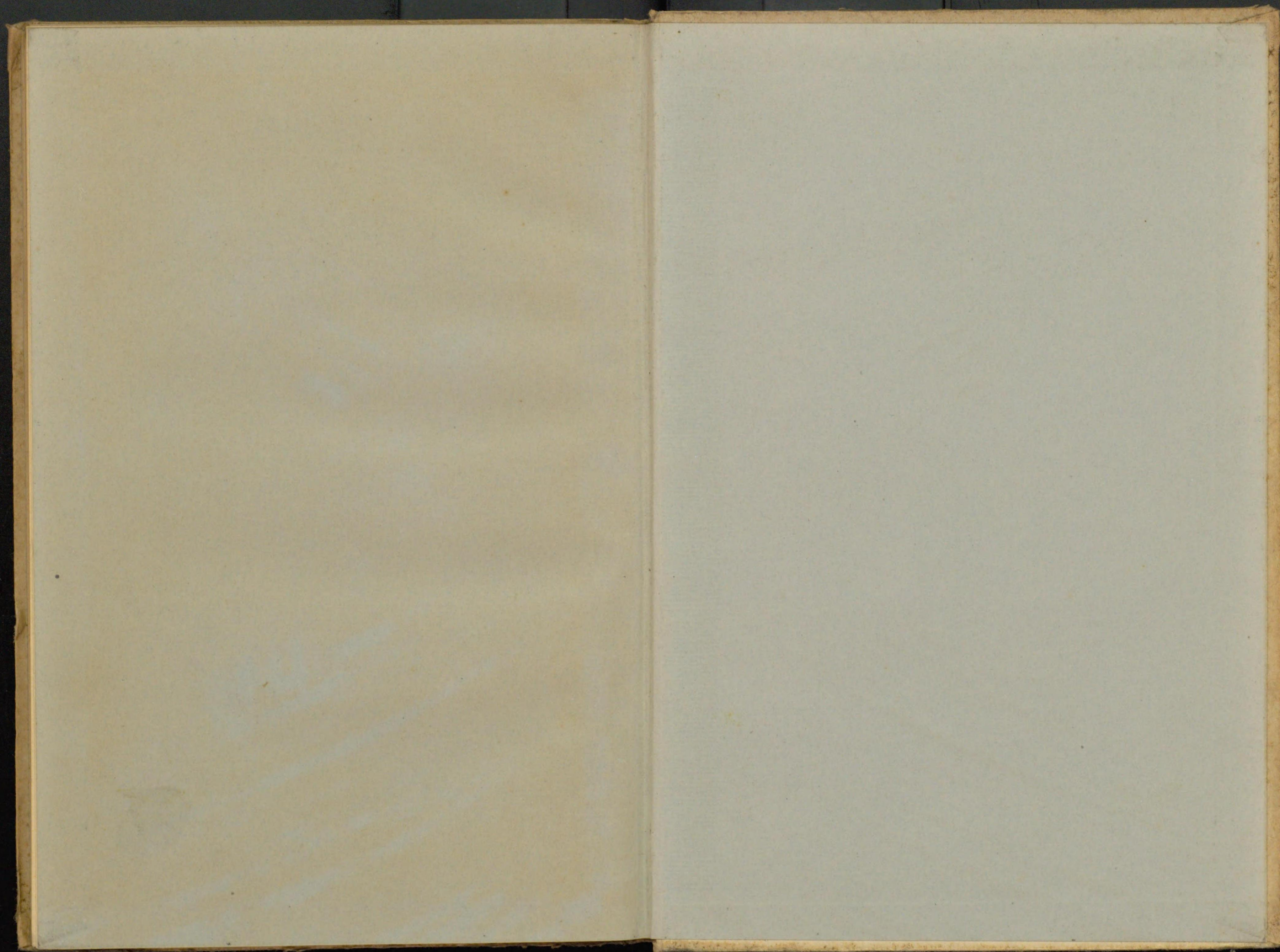
日

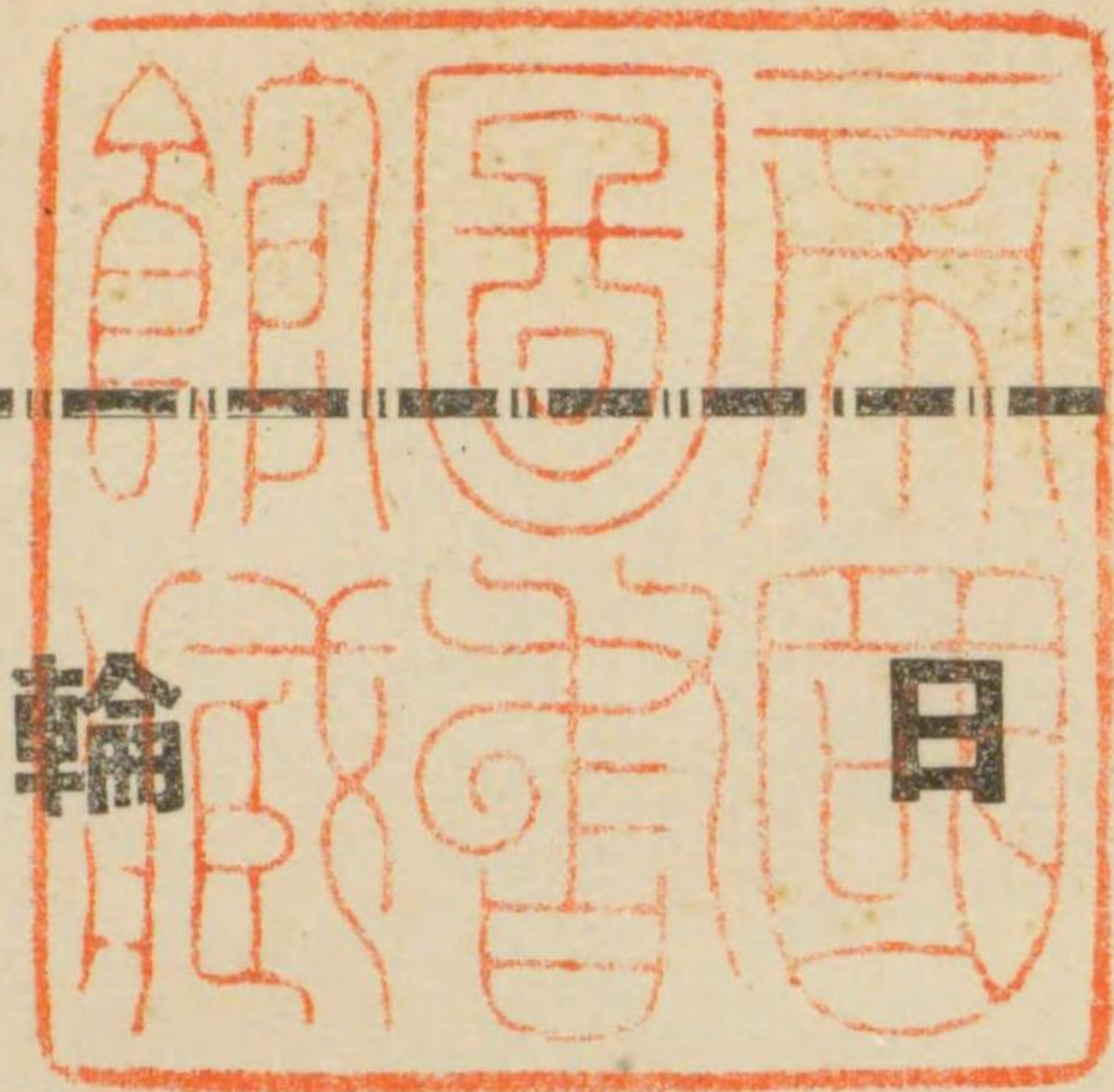
629-44
1200501540479

野

野







銀 河 叢 書
第 一 篇

銀 河 社 發 行



發行所寄贈本

629-44.

序

銀河創刊第三年、即ち滿二ヶ年間にける我々の精進の結果が、こゝに、銀河叢書第一篇歌集日輪となつて、生れ出たわけである。集る者三十七名、総歌數二百五十首。

勿論、叢書第一篇として、未だその内容は精鍊され切つたものは、決して思つてゐない。然し乍、眞に是こそ我々の、スタートであり、第一歩である。

石の上にも三年と云ふ言葉がある。我々は、今日まで過去三年の間に、此言葉の眞意をしみじみと味つた心算である。そして、生意氣の様であるが、遠大な將來を夢みる吾々は、こゝに、今日までの

銀河叢書

精進を基礎として、いよく第一歩を踏み出し度いと思ふのである。我々は、徒らに理想に走り、輕舉動搖する事を嫌ひ、堅實なる徹底的歩みを常に希念してゐる。この歌集に、華やかなる離れ業が見えないとしても、眞摯な所が認められるならば、満足である。

スタートであれば、今日の些細なる此書の色調、各人の萌芽が、やがて伸び足り、花開き、燦然として彩られるの日を、ひたすら期待する事は、言ふまでも無いが、それと共に、創刊以來の精進が、かうして一冊の歌集に纏めらるゝに至つたことに對して、この上なき、喜と感謝を、覺える次第である。

此の書をものした動機は、言ふまでも無く、先輩諸氏の御高評を願ひ、又自らを反省することによつて將來への精進に資したいが爲である。

幸に、先輩諸氏の親切懇篤なる御批評を受くるを得、今後吾々各人が、よりよき生長のため、絶えざる努力の積まれん事を希ふ。

昭和八年春日

日暮里狭屋にて

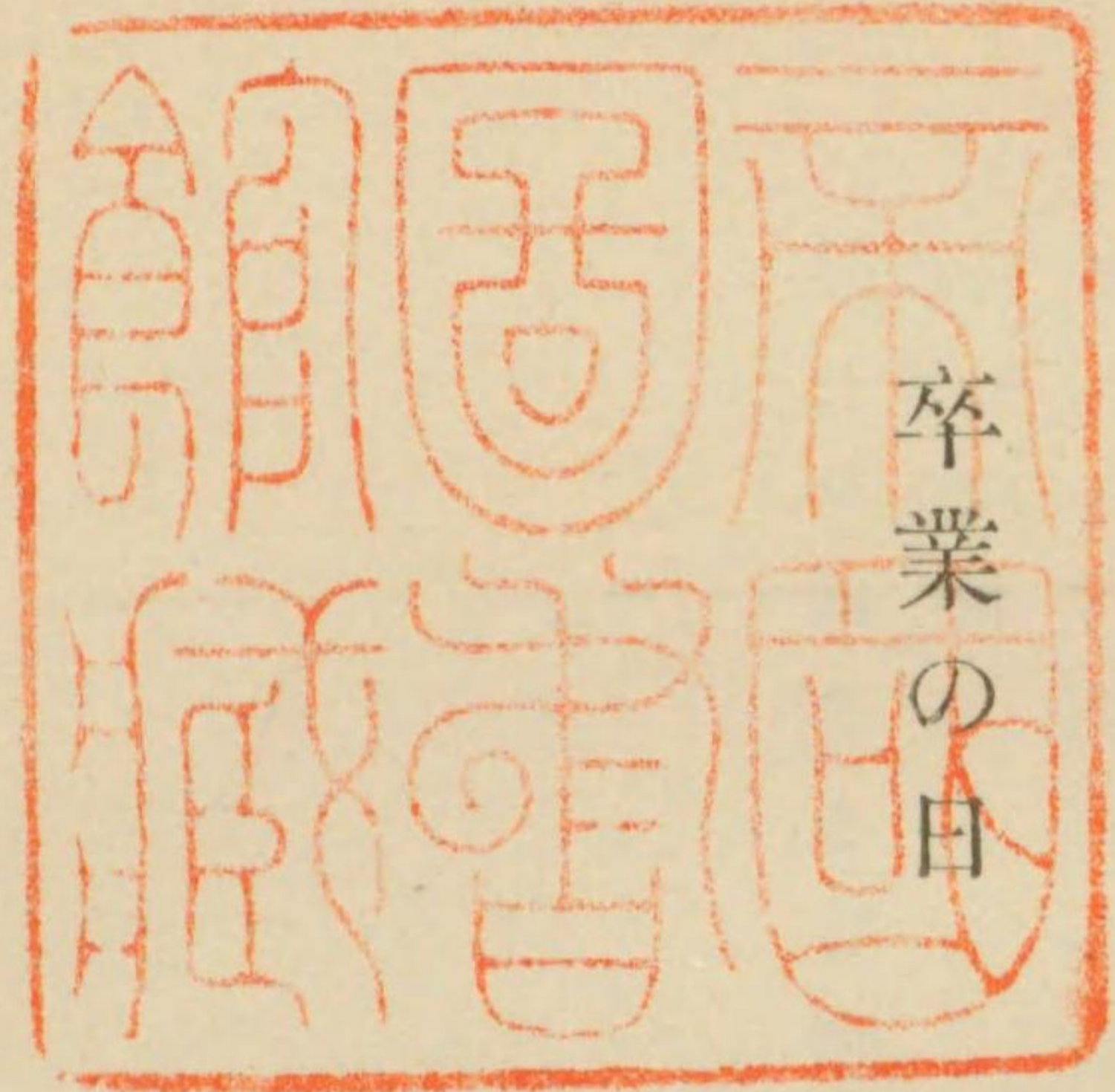
宮崎 勝 好

日輪目次

濱	火	父	白	不	朝	月	卒
	の	の			の	夜	業
	見				庭	野	の
草	櫓	死	雪	二	村	日	
.....
.....
.....
.....
.....
.....
瀬	萩	上	平	宮	水	平	大
戸	野	村	山	崎	島	山	澤
正	古	織	若	雅	増	ま	季
太	都	香	水	子	夫	り	穂
郎	路	(三)	(三)	(二)	(三)	や	(一)
(三)	(三)					(七)	

日輪

雲雀鳴く里	墓參	自殺者	群れ鳥	瀧過水	空ゆく雲	白き花
.....
宮崎勝好(二六)	萩野折枝(二三)	杉本きみよ(二〇)	杉本武夫(二六)	吉水經子(二四)	横山美砂路(二三)	中曾根かめ代(二八)



すり硝子の外に蛾のゐてひたむきによぢのぼ
らんとはばたきをする

大
澤
季
穂

日頃うとき庭園に来てしみくと寝ころびて
みつ卒業の日我の

懐しみめぐる庭園のひとすみに木蓮は白き蕾
持ちたり

幽けくも河鹿の聲のすみとほり岸草の露みな
ひかりたり

荒れはてし塚並び居る多胡の原砂けむりして
今日も風吹く

畑の虫を打ちつぶすてふ藁棒をうち歩く兒等
夜を歸らず (十日夜二首)

あらがねの地うちかため曲つ虫うちほろばせ
と打ち渡るなり

衰への目に立つ父のこの頃はかたくなごころ
見えすなりたり

月ごろをいたつきゐます吾が父の病は如何に
寒きこの朝

いたつきのいやまさりてば歸路に父なやむら
ん母まどふらん

昌人の近くの海ゆ漁りしてふこの蛤は大き蛤

月夜野村

平山まりや

おほむねの家作り高し吾がいゆくこの街道は
月夜野へ通ふ

月夜野の村をばずるゝ土橋より澤の流れを耳
にしてすぐ

街道の家並ゆ馳せて出でし稚兒追ひて出し兒
は飛礫をかざす

家並の盡きて下れる街道の坂の地平に村現は
るゝ

家並はまばらとなりて夕つ陽のおはに射すな
り道幅かけて

越えて來し山思はするたをやかのあけびつけ
たり馬子の曳く馬

かきみだれ高くは燃えぬ焚く煙この高原の南
に流る

高原

かきみだるゝ焚く火の煙消ぬべくは風とほる
なりこの高原の

煙消えむとしてひろがれば狂へる羽音に立ち
て群鳥逃げゆく

快よきねざめの窓に並ぶ花見れば一つ一つ光
もちたる

ほのぬくき重さ保てる幼兎は柔毛の底に目を
つむりたり

朝の庭

水 島 増 夫

鳴く鳥は何にかあらむ軒ぶどうの廣葉舞ひ落
つ朝の庭に

鈴虫の聲はすみたり木犀の香こめたる宵月の
庭に

朝つゆにものみなぬれてれいめいの静なる地
に蟬なきすめる

白百合の花ただ一つれいめいの光すがしく受
け返すなり

灯を戀ひて狂ふ一つの蛾の羽音しみくきけ
ばすでに秋なり

不二

宮崎雅子

幾すぢの山襞雪のけざやかに不二の山腹片あ
かりせり

静寂なす相模夕野にそびえ立ち不二は裾より
しづかに暮るゝ

白雲を湧かすか湧くか嶺は見るべくもなく汽
車出でんとす

夕空の後へに高き遠つ富士雪光りつゝ見の神々し

憂苦動亂世にあるべからず萬代を静もる不二が夕空に立つ

高原のこの谷峽に風生れてもろ樹々ゆるゝ夕さむさむ

風荒るゝいで湯の町はともしらのあかりつけたり夜霧にうるみ

風荒るゝ夕谷添道芝の下ゆく水か音にむせび
つゝ

何鳥か枝移りつゝ鳴く鋭聲きりぎし反りすみ
響き來る

白
雪
平
山
若
水

白雪の降り溶けにつゝ不忍の池灰色に靜かなり
けり

日の暮の町の灯戀ふる鹿の群僧手をひろげほ
うくと追ふ

野分して倒れし大木起さする庭師等よりてか
け聲かなし

浪の上に鷗立ち立つ初秋の浪静かなるその浪
の上に

青海を渡りて秋の風來たる圓き破丘の高みに
立てば

車下りて秋雨に又霑れにけり告別式の寺の門
邊に

諦めて涙ぬぐへば在りし日の病みやつれたる
娘の寝姿が

逝きし娘の室に又來て立ち居たり疊換へたる
香悲しも

逝きし娘の室に立入りて所在なしすなはち出
でて廊下を歩む

神婢まりやの墓標にそゝぐ夕雨や蠟燭の火の
さゆらぎ光る

死にゆきし娘の在る世界夢みんと眼ふたぎ居
り只青き山が

父の死

上村織香

祭日としいへばとく起き出て老父は國旗かゝ
ぐるを樂しむらしも

その夕死すとも知らず門のべに國旗かゝげて
居たりし父は

その手もて朝夕ふれし煙草盆父のすえたるま
ゝ部屋にあり

亡き父にまつはる用事片付てうら淋しさに香
たきて居り

君あらぬこの年もまたはるくとすすらん
花は送られて來し
まり子さんの死

逝きし君の行事一つ一つ片付て淋しさのみが
まさり迫り來

君あらぬをならひとせるかはしための其名言
はぬが淋しかりけり

咲きたわむさるすべりの枝ほのゆれてひねも
す流れに花こぼし居り

白き布引けるが如き奥利根の流れ見下し父の
碑は立つ

火の見櫓

萩野古都路

錢なくば建つる火の見は古のまゝの丸木なり
かなしからずや

吹く風に亂れて遠し向つ岡に火の見建つると
あぐるかけ聲

新しき火の見櫓はたちたりき昔ながらの火の
見やぐらは

新しき火の見櫓の白々と夕べ風ぎたる岡に立ちたり

村人の歸りし後の岡の上に夕べ寒々と櫓たつ見ゆ

濱草

瀬戸正太郎

大川のむかひにつづく本所深川くもりに昏れてさびしき汽笛



外濠にさゝなみたてゝ風はゆき四谷赤坂黄昏
れにけり

ひと戀ふと母にも吾げずひと年のさみしきこ
とをまた思ひつゝ

寺の庭に交尾終りてしづかなる二匹の犬は未
だはなれず

濱草の蔭にひそみてひねもすを砂嚙むごとく
きりぎりす鳴く

砂山に生ひし濱草末枯れてかたきを嚙めば鹹
からきかも

両側の南瓜畑に花咲きてこの砂道は海につづ
けり

泡となりひたひきにひく潮波ひき極まりてし
ばしたゆたふ

幼けなき教子二人つれだちて吾が前に來ぬ過
ちせりと

しみじみと煙草やめんと思ひつゝ吸ふさしの
殻を灰に埋むる

どぶ水の中に動ける浚渫機赤錆びてをりにぶ
き日なかを

赤松林

松下勢伊子

朝雨に幹もこぬれもしつとりとしめれる赤松
林ひそかなりけり

大いなる幹のはだえの冷えくくと赤松林に時
雨するなり

よぎり行くぐるまの中にしみらにも松の香の
ただよひきたる

つゆじもにその葉も枯れし一本の曼珠沙華咲
くただひともとの

もの寂びて何にかゆたけきびはの花咲きそろ
ふころの道のしづもり

北國の旅

出口 王仁三郎

外濠に啼く五位鸞を光秀も夜のしじまに聞き
たりにけむ

初夏の陽のうらゝに照れば川の邊の新樹の梢
に蜂唸りをり

此宿に藤波の花匂はずば初夏の温泉は淋しか
らまし

太陽の前にかぶさる片雲の影は大きく地に落ちにけり

千早振神代のまゝの姿かな金梨の尾根を上る月光

苔むせる多武の大樹の下蔭にわが歌碑建つる地を定めたり

北國の旅を重ねて青森の館に眞晝を眠氣もよほす

見の限り陸奥の大野は雨煙り初冬の風の身に
迫るなり

別院の赤き瓦に照りわたる秋陽は清し紅葉は
えつゝ

観松閣おぼしまにたちて青森の雨降る今日を
さびしみにけり

この朝を雨降りしけばぬかるみていゆき惱み
ぬ青森の街

歸郷雜詠

竹谷あさ代

いと太くなりて淋しや桃の木
の古里去りし日の
小さき桃の木

行く船の後に残りて一すぢの波がしら
白し夕暮の海

ひさ／＼に歩みても見ん古里の山
の細道昔のまゝの

果もなく續く蜜蜜畑赤々と今を盛りの古里の
秋

荒れ果てゝ住む人もなし古里のそぞろ歩きに
友の家訪へば

夜の湖畔

栗原俊穂

酒倉の窓は細目に開かれて薄陽射せる中に人
のうごめく

こもり深く蛙鳴きをり眼をやれば水蓮の葉の
黒き湖

焼跡の月おぼろなり子等が来て焼けしミシン
をふみならし居り

急停車すれば椿は窓近しこごみて女コンパク
ト打つ

エレベーター出るやすなはち眼に入りし舗道
の雨のひそかなる降り

サイレンの聲は長し背戸に咲く晝朝顔の花を
ゆるがす

境内に我一人なり見上げたる雨の夜空は垂れ
下りつゝ

誰も居ぬ朝明の暮や閑伽水の面に雲の盛れ上
りつゝ

大榎しきりに黄葉落しつゝ木下の闇は深み來
るかも

松の枝くぐる雀を見入り居れば人の來にけり
裏門しめに

笹の上の朝靄は陽に煙りつゝ空の晴れどに續
き居るなり

木 枯
伊 東 八 重 子

我が歩りく道芝寒し溜池に波泳がせて木枯の
吹く

兒に乳を含ませ歌ふ子守歌に今宵の風は聞え
來るなり

翌日を約して歸る友の聲夕川風に寒く消えた
り

君見えて子と連れ歩るく海岸線今朝の日の出
を美しと見る

撫子に手をかざせども取らず來ぬ今朝の海岸
潮靜かなり

吾子抱きて話す人なく見る湖水芦の水底藻草
流るゝ

一列に並び立ちたる真砂路の大焚松の火ば天
を覆へり

太陽に向ひて咲ける向日葵の黄なる花の輪軒
にとどけり

傷洗ひやれば小犬のさかしげに小首かしげて
我が手見つむる

秋月の下

鈴木昌人

月の下の白々と長き道を行く空車の音は遠く
鳴り止まず

うす高く盛りすてられし糶がらの烟りほそぼ
そと夜もけむらん

壁にある吾か影動かす黙々と時雨になりし氣
配知りつゝ

白々と秋月の下に横たわり流れの如く高原の
夜は更く

ばらくと時雨わたるに色褪せし茅野の赤の
さらに悲しき 失戀

山茶花

穂 積 静 香

心なし怒れるまゝに言やめて黙して居ればわ
びしさのわく

二つ三つ残れる花に氷雨降り重みにたえずポ
ツタリと落つ

校門に立ちて送れば小さき姿ふりかへりつゝ
辻に消えたり

ながき日を花にも暮さでこもりゐてかへる夕
にひばり鳴くなり

その顔を熱と意氣とにこはばらせ兒童は聞き
ぬ清磨のこと

渡り鳥

毛利紀伊智

沈みゆく夕日うすれし空になびき櫻島の煙赤々と登る

測候所の晝はひそけしヒラヒラと花園の中ゆ
信號旗上る

あかくと西日照りつく築地かげ花向日葵は
ひそやかに咲く

曼珠沙華むれ咲く朱の影うつしこゝに淀みて
澄む秋の水

磯崎の夕陽あびつゝ聲たてずむきくに行く
渡り鳥あはれ

初戀
岸
曉
子

卒業のアルバムくればこの友の強き香水の香
思ひ出らる

咲きかけてはかなくしほみし櫻草わが初戀に
似たるものかな

未だ見ぬよき人なれど幻に甘えても見る早春
の日は

病む妻の甘える言葉解くすべを知らぬ夫は腹
立ちて居り



會ひ見れば遠き昔の歸り來ぬ戀とも言はむ初
戀の人

夕張炭山

齒 朶 良 介

山 近み 谷川 迫る ころを しも 汽車 通る なり 夕張
にこそ

艶黒の 石炭 積める 貨車 なれや 續きに 續く この
山 峽を

黒山の 山腹 影に むらがりて 坑夫 等の 家並 低く
續ける

並續く家々低しこの街に疲れ來寝ねむ人のあ
われさ

男等は地の底深く岩穿ちなほ妻子等のこゝに
働く

壁に添ひ泌み流れ落つ潜流れ清水の音か闇に
聞ゆる

山底に深く通づる闇穴の斜に傾き續きに續く

焼野焼山

やゝ高きこゝ樺太の丘に立ち野山火事跡遙け
きを見つ

目の下に展けて曠し丘つづき對ひ山また焼樹
焼山

視おろせど焼野焼原續きにて青き葉ひと葉見
えぬわびしさ

黒枯るゝ焼野焼山今はしも夕映え近み幹々は
赤し

淡雪

良陸小智子

淡雪の朝日にとけてチロチロと樋より落つる
音かそかなり

潮風に明け行く朝の光あび船は出船かどらの
音高し

月かげの小川におちて音もなく千々に碎けて
さゆらぎてゐぬ

み社のを暗き森の木の間より夜明の星のまた
くくが見ゆ

訪ねける人の姿は見えずしてゐろり邊に猫う
すくまりぬ

伊豆の旅

志

野

董

山めぐる下田港の明けやらぬ海原しづかに泊
舟あり

山越して村道走る乗合の窓邊に近く椿花咲く

岩崩の海沿の道乗合は網干す村を行き過ぎに
けり

春の陽に枯草もえて葦草小風にゆらぐ南伊豆
原

岩嶺める潮騒高し草に寝て海面眺めて石室の
岬

海棠

熊澤きよ子

海棠のチラホラ咲きて朝露のうるほひ含む若葉明りに

久方の雨の恵みに心地よき夢結びたる今朝のすがしさ

雄々しくも世の荒波に竿させど折りくは淋しをみなかわれも

房州をひと巡りしてつくる頃海の彼方に夕陽
沈みぬ

亡き友の母の涙にひたされてわが胸痛みこと
出だし得ず

友の家

木村敏

庭先に土もり上げてさゝやかにさゝげ播き居
り友の家の下婢

お産後の友の妻は頬青くうつむき事務とる何か寂しげに

お祝のお菓子もらつて兒童等は霜どけ路をいそ〜歸る

しとやかに話す貴女の顔面に眞實の貴女を求め私

思ひ切つて踏切つた足がすぐ砂場に落ちて激痛が私の顔をゆがめる

船の若人

沼田たみ代

朝焼の旗雲の中に光る星うすく赤き光保て
り

大海の一ところ何十の船よりて色々の旗空に
ひらめく

ぶり網曳く船の若人はだかにて二月の海に汗
流し居り

妹の土産かゝえて弟は皆のまわりをおどり廻りぬ

夕ぐれのもや深み行く天城路に自動車のライ
ト走り行く見ゆ

向ふ萱原

大木芳枝

昏れなづむしばしを空の明るくて裏山紅葉き
わ立て見ゆ

曇り日の向ふ葦原陽光通りほ波映えたり風渡
るらし

寂けくもかそけきものか山峽の日だまりに
てせゝらぎきこゆ

つるうめもどきの影落したる山峽の日だまり
ゆるく川の流るゝ

ままならぬは人の世のつねゆめくもなげか
じと吾が花に親しむ

霜の朝

齋藤榮作

100

老杉の空摩するあたり淡霧の流れ白々と明けて行くなり

おとろへしゐろりの端に祖母一人雪降る晝を眞綿くりをり

校長を頭に四人相呼びて闇の校舎を窓しめに行く
嵐の夜

101

自動車のすぎし田舎道人をらすわだちつづき
て雪原を長し

霜深き朝を群れ飛ぶ鳥の羽音高くひびくも我
が家のむねに

白菊の花

佐加美珠香

たまさかの日曜なればぬれ縁に眞白き肌着と
りて笑ましき

しんくゝと凍て来るものか弱き身をつくづく
思ふ月を仰ぎつ

我が身よりはるかに高き墓石の上よりかくる
水の冷たさ

そぞろ降る雨の夕は灯の下に白菊の花静かに
生けむ

思ひごとやうやく語り我が頬に蒼白き月を感じ
じゐるなり

朝鮮遊草

後藤譽富

106

朝霞はらひし風の空澄みて岡山城閣秋をくき
やか

吾が船に碎けては散る浪の秀の光かそけき淋
しさを見つ

紫に匂ふ浪間の果にして對島燈台傾けり見ゆ

107

かそけき命とりしづめむとそこばくの敬震丹
をかみくだきつゝ

ゆられつゝむすぶはかなき草枕旅のねざめを
一人さびしむ

父

石

原

節

父とはどんなものかは知らねども伯母のすゝ
めで手紙書きたり

初めての父の手紙に父はなし墓場の下にあり
と言ひ來ぬ

うそつきめ知つて居るのにと手紙見て涙流し
て鼻かんで捨てぬ

物心つきて初めて見る父の近づきがたきその
いかつさは

便り待つ父の心に何やらむはむかひてみたく
便りおこたる

夕月

尾崎敏子

灯を消せば窓の邊さむし十六夜の月に明るき
白梅の花

湯のまぢの夜更の雪は明近くみぞれとなりて
消えいそぎをり

裏庭のうすら夕月仰ぎ見てあはれと今は思ひ
出でつも

みかへれば軒場の梅の一つ枝夕づく空の灯に
匂ひ居り

庭隅の落葉はきつゝ高聲にも言ふ人は彼の
君らしも

葦

刈

古

山

秀

緒

吾が刈れる州の葦の秀を吹きまげて寒々晝の
風つのりけり

ゆふべ寒く風はつ
のれり葦刈れる州に近々と
汐満ち來たる

葦刈れる州には明るき夕陽ながらうそ寒く空
に月のかゝれり

今し汐干きしばかりのしめりたる朝洲に下り
葦刈らむとす

刈り残せし葦のあたりも潮干きて朝吾が立つ
川の洲廣し

白き花

中曾根かめ代

病む君がバンドに白き花ゆれて寂しきながら
春のいぶきす

幼子の如くむづかり氷割る我手の遅しといら
だち給ふ

やまひとくゆるたのめば瑞籬に今朝チヨチ
ヨと小鳥鳴く聞ゆ

苦しみのいえたるならむ眞赤なるリンゴをか
ざし我にたわむる

歌詠む事もペン持つ事も我に捨てゝ女に生き
よと言ふ人のあり

空ゆく雲

横山美砂路

我も又旅人なりき烟立つ山を眺めてしばした
ゝすむ

本堂の太き柱のその向に讀經の僧の小さく見
ゆる

悲しみにあふ度毎に悲しめと師はのたまへり
雪の降る日に

うすあかくなりたる雨後の空あはく田の面に
うつり夜はあけにけり

海岸の砂畑に青き麥のびて沖遠く晝の潮鳴り
つづく

濾過水

吉水經子

ほのぼのと梅花匂ひて朝井戸の濾過水に白き
影のさやけさ

釣瓶たるゝ滴りつぎて朝井戸の底にかそかな
音落ちつづく

井戸の邊の朝閑かに霧わたり濾過水満ちて溢
れ流れ居り

夕空に月暈かゝり梅の花白く匂へり井戸のほとりに

しみじみと旅の淋しさ味ひつ吉野に辿る朝霧の道

群れ鳥

杉 本 武 夫

森の上をめぐりて飛べる群鳥夕映空にくきやかに見ゆ

森の上を舞ひ居る鳥きれぎれの濁聲に啼く遠
き夕焼

しばらくを啼かず飛び居し群れ鳥森の枯木に
皆とまりたる

暴風の吹きすぎしあとつばらかに秋山が峯ゆ
鳥群れ立つ

鳥の影はるかとなればただ黒し杉生の峯の空
にまぎれて

自殺者

杉本きみ代

130

そこばくの雲來れり天龍の流れのひびきけ寒
くおぼゆ

なりはひにいまだ慣れざる手の荒れにくすり
ぬりつゝ心淋しき

血のりの香かすか漂ふ鐵橋のレールに白く明
の月かな

131

苦惱の色腫にこめて見ひらける若き男の悲し
きかふべ

消えやらぬ残んの月に血みどろのかふべは悲
し胴の無ければ

墓 参

萩 野 折 枝

遠く來し身を山門の蔭によせしばしを拭ふ春
雨の濡れ

嫁ぎし地に一人眠る姉の墓参をなす

線香の煙靜かに昇りつゝ春の雨降る姉のみ墓
に

去りがてに傘さしおれば線香の煙は淡く雨に
消え行く

峠路のこゝは頂き見下すに朝けを光る霜の茅
原 雑詠

掃き終えし子等は宮居の森深く椎の實拾ふと
皆かけ行きぬ

子供等の砂にほる池ひろがりて干潮の濱は今
眞晝なり

小鼠はふとあたり見廻しその眼我に向けたり
物食むやめて

ぬれし幹冷え冷え見えてひねもすを氷雨止ま
ずも向つ竹籬

我村に通ふ峠の路崩れ越えがたき山をじつと
見上ぐる

雲雀鳴く里

宮崎勝好

南風の音はげしき日なり留守居して淋しさに
わがうたゝねをする

雲雀鳴く里は春風麥の葉を渡れば光るその青
き葉が

啼きつづくる雲雀の聲はよしと聞かむ絶えだ
えにきけば悲しきながら

裾赤く風に靡かせ來る人はやがてを妻と吾が
呼ばむひと

世に生くる二人の今はたはひなく雲雀聞くな
りただはるばると

れんげ咲く岸に二人を坐らせて小川の水に魚
泳ぐなり

近づきし聲をおはりにながく落し地に下り立
ちし雲雀小さし

雲雀空に鳴けるばかりに家の人障子開けしま
ゝ誰も居ぬらし

障子みな開けはなしある八疊に頑具散らせて
子供も居らず

歸り來し人居らぬ家の軒雀晝鳴く聲は淋しく
聞かゆ

軒雀鳴くが淋しと一人居る留守居の家の牛も
啼くなり

手
帳

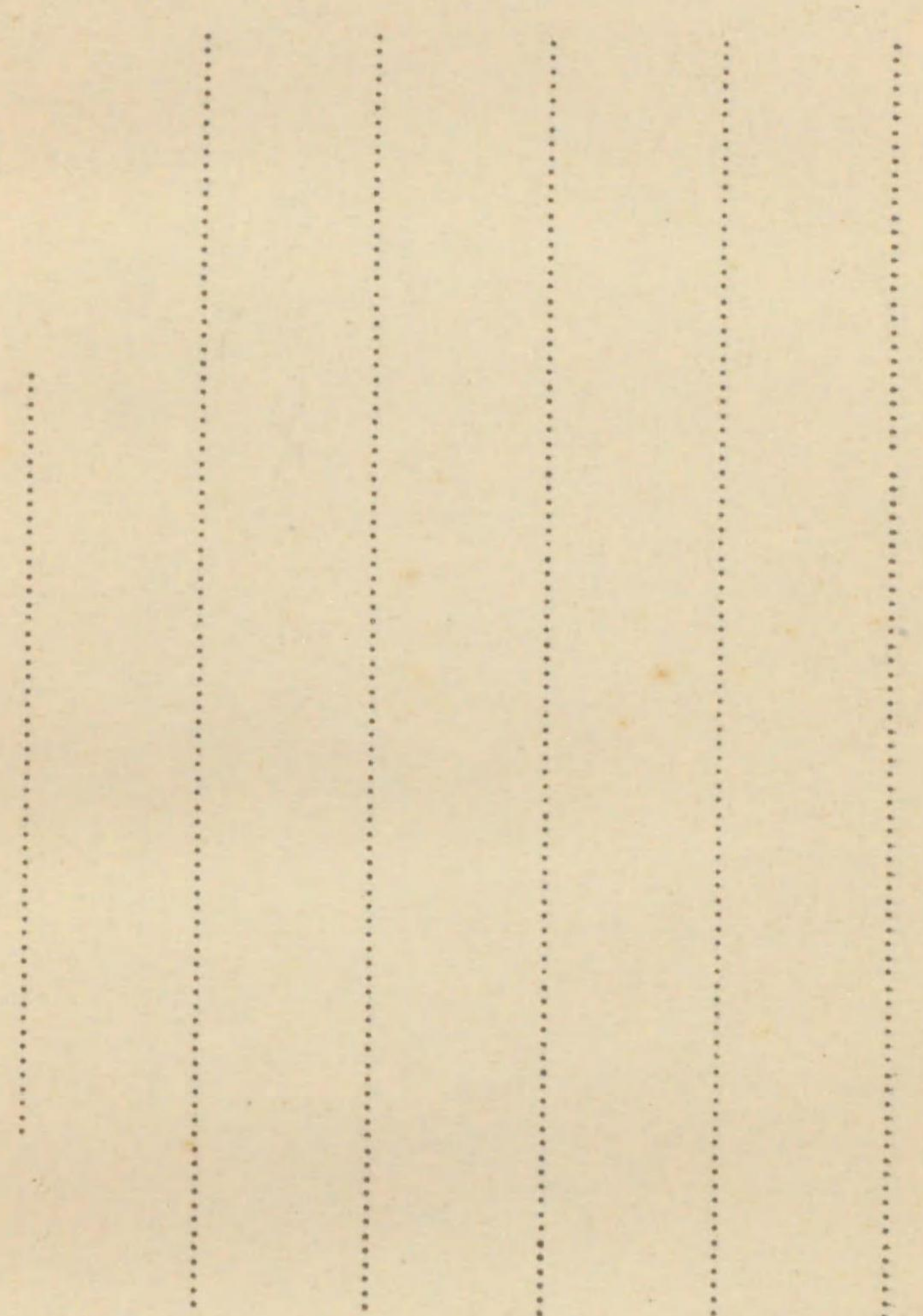
日
輪
終

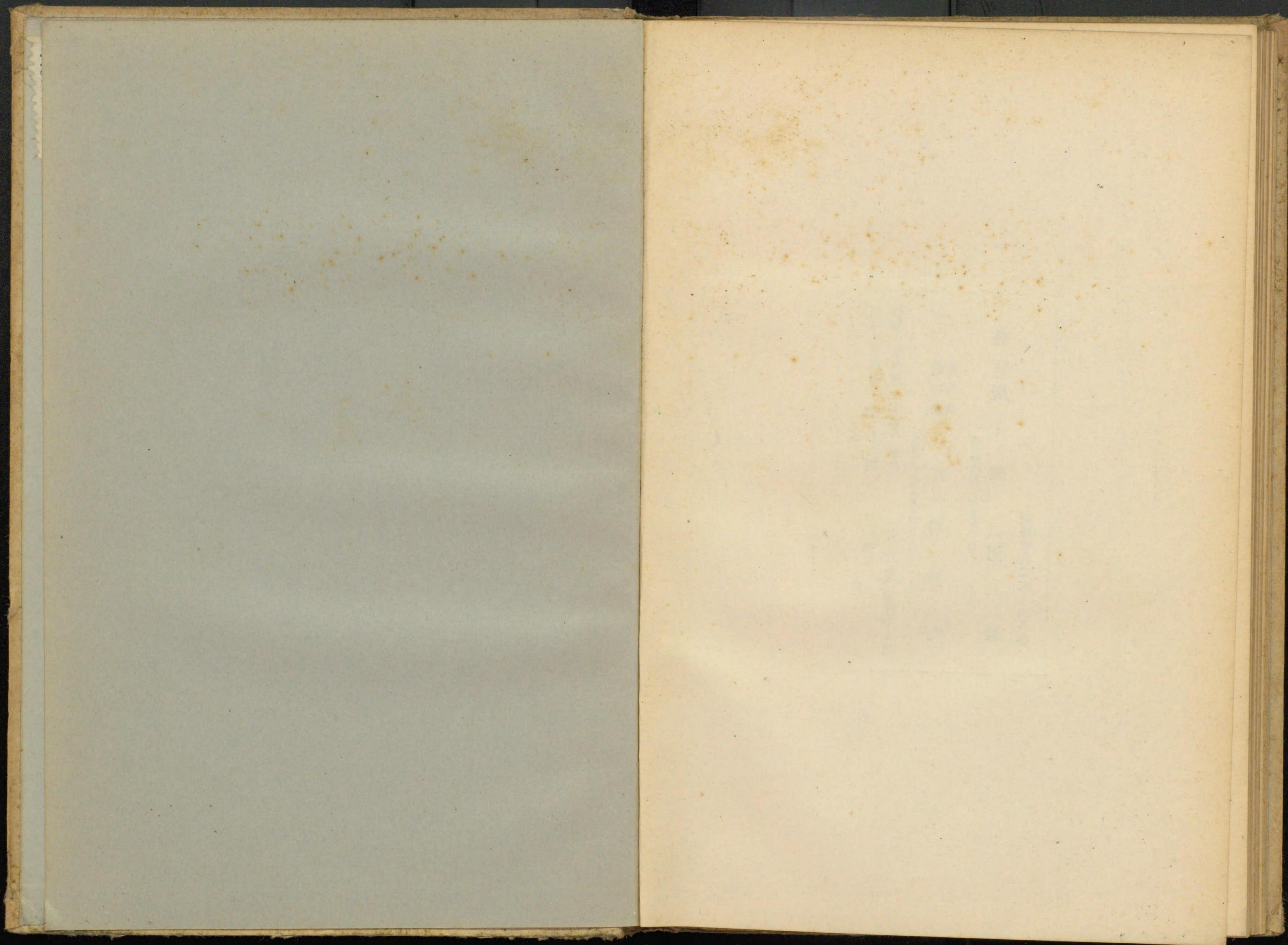
昭和八年四月二十日印刷
昭和八年四月二十五日發行
日輪奥付
(定價一圓、送料十二錢)

編輯兼發行者
東京市荒川區日暮里町三ノ輪アバト十八
宮崎勝好

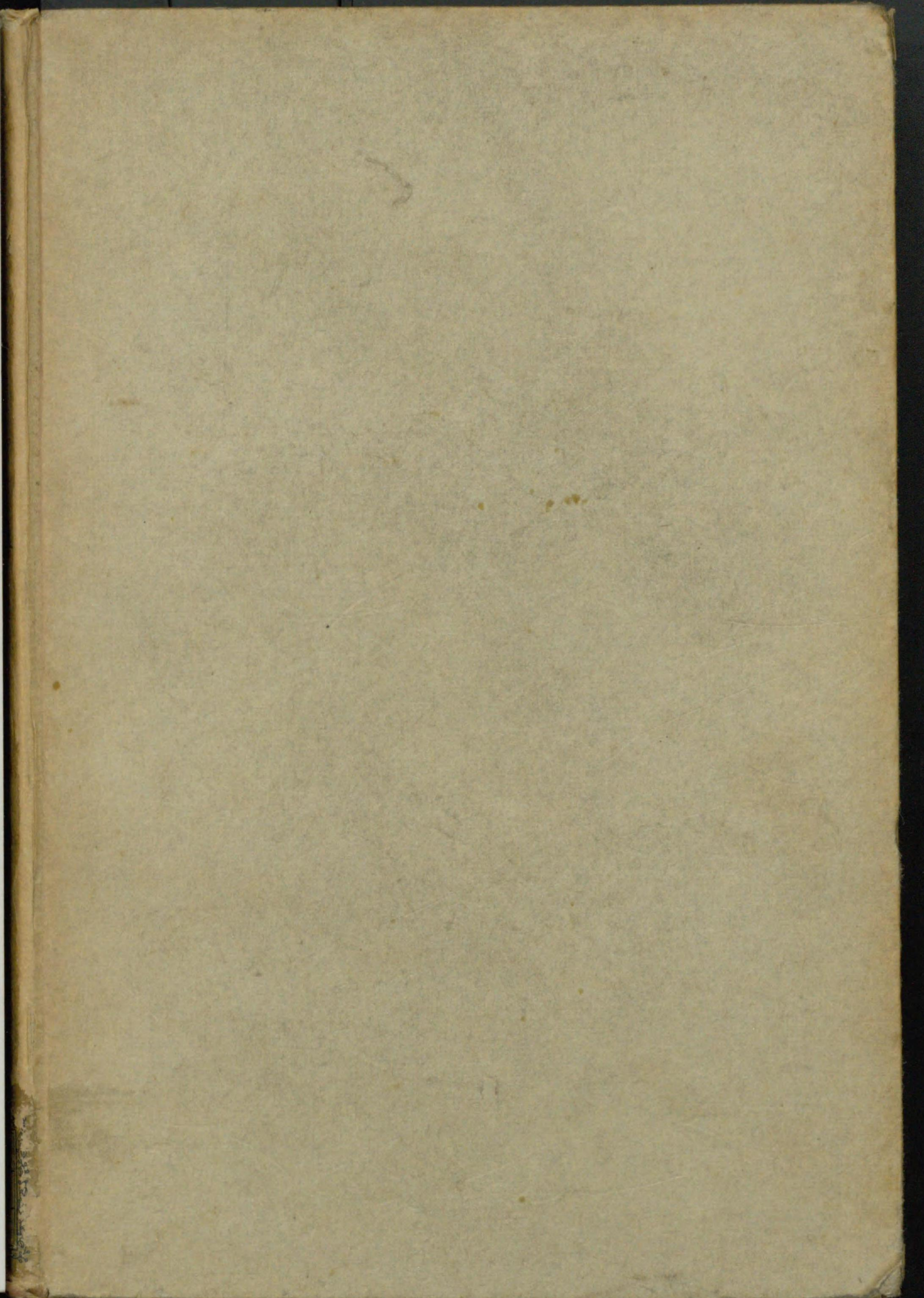
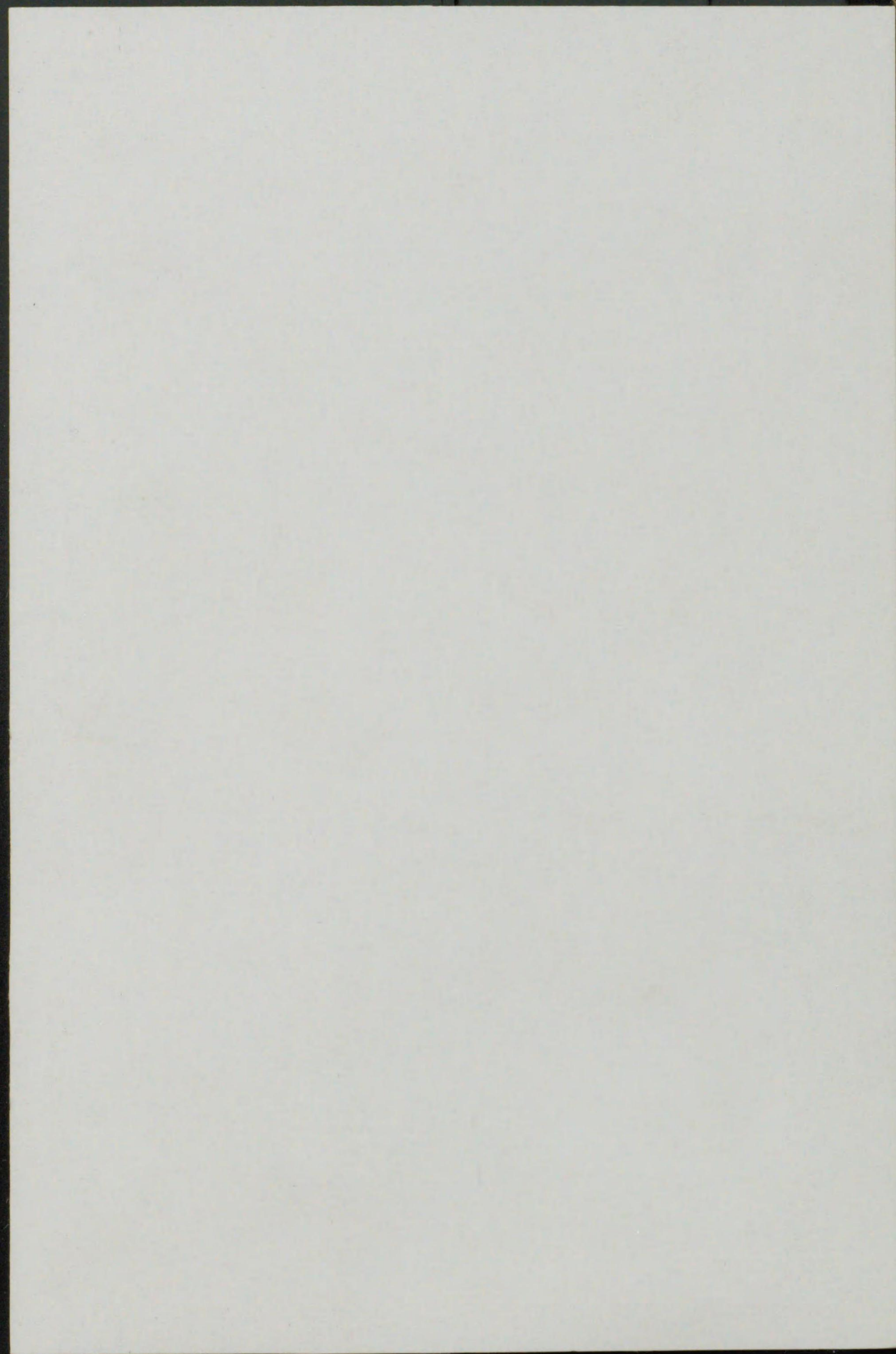
發行所
東京市荒川區日暮里町三ノ輪アバト十八
銀河社

振替東京二五八五八番





629
44

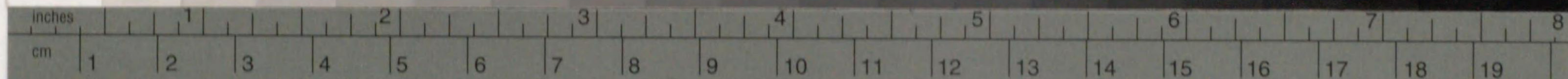


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

